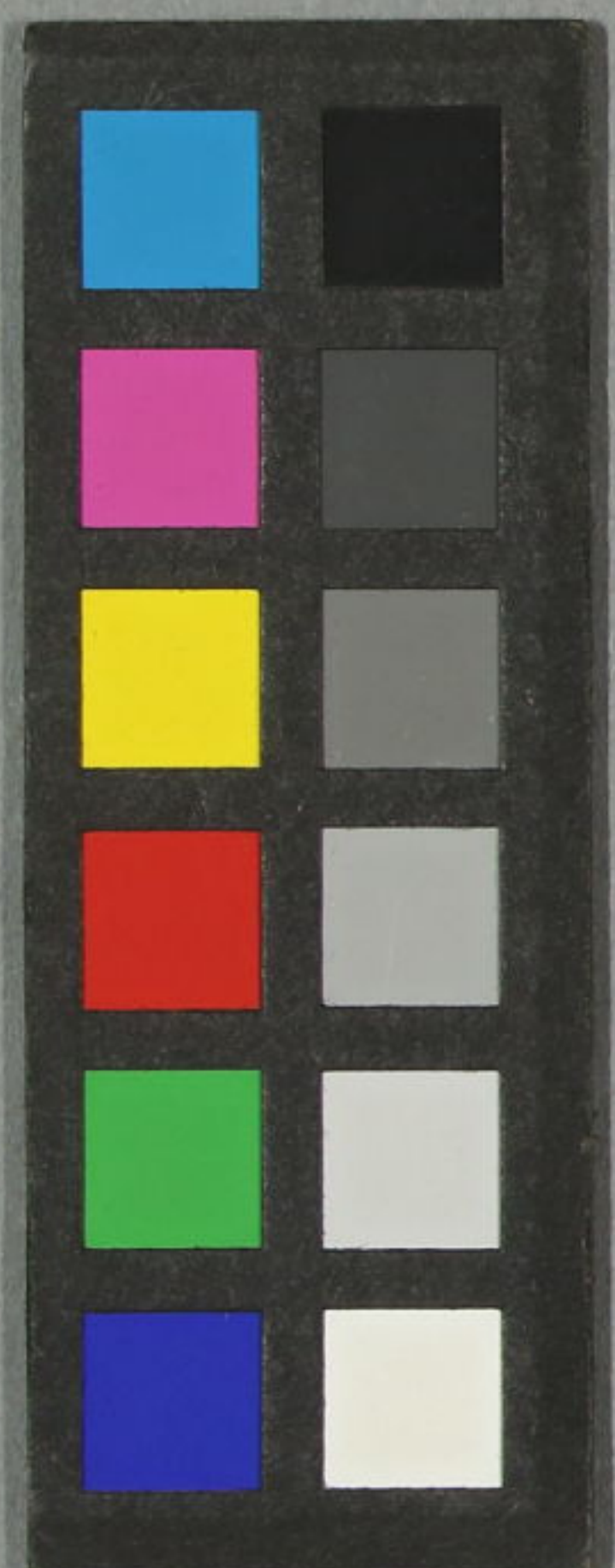


俳諧一葉集

後編

一



邕舊翁叟曰附合文章茶話俳諧遺法消  
息也一代之風藻雖不可考于茲所謂親覩  
於右書收藏於他庫者悉以舉焉

# 俳諧一葉集

前後篇六冊

東都書林

青雲堂梓

## 序

俳諧者非常色而中格妙門也  
世人妄謂一時戲言綺語也豈  
夫然耶蓋能致知而達理之常  
變氣之順逆固守自得遊心於  
太虛則語默作之無有不善故

棄名利而造之靜安可獲焉誠  
意而為之身脩家整舉不外乎  
此矣昔從芭蕉啟正風雲從風  
靡今雖其流間有渚者泝源者  
亦不少也屬者社友集錄翁一  
期所嘯以為小冊以便卷懷可

謂夜行珠矣傳曰法不自顯弘  
之在人湖子其人乎是為序  
文政十亥歲四月

仙波僧正書于蒼筤

林中之谷神齋 同藺

山越野之書子...  
 交...  
 入...  
 野...

俳諧一葉集紀行之部



甲子紀行 又稱野  
曝紀行

去里子松立し流輝も色は三更月二骨白入し山けん  
 起りの人の杖すすううと真草甲子秋八月江戸の破屋を  
 立りて風の吹くそよよふけり

秋十とを却て江戸もさきり古  
 并らうりら西海へ山をわたりかきわたり

古學庵佛考 編  
 幻窓 湖中  
 坎窩 久藏 校

夢野向不三とてぬきそせしりま

何れ千里とせけりハサハシのそよひのけりあつて葉のこころ  
あつてつゝけり昔も真逆のわづらひゆくゆ友に信をけり  
此人

深川やきき道へこ不三河のけりゆく 子里

不道川のいともさゆへに三はつてあつて信子の河をけりゆく  
信ありけ川のよ流をかけし信子の波をきよくにゆへにあ  
らうけりあまの河にけり信置けん小萩のよの秋の風をよひ  
やちるゝあまの河をきき信置けん夜よるゝあまの河をけりゆく

信もあまの河にけり 秋の風をよひ

いともあまの河にけり信置けん母のよのけりゆく父の河を信  
置けん母の河をけりゆくあまの河にけりゆく信置けん母の河を  
けりゆく母の河をけりゆくあまの河にけりゆく信置けん母の河を

信置けん母の河をけりゆく

大井川をこころをけりゆくあまの河にけりゆく

秋のよの河にけりゆくあまの河にけりゆく 子里

あまの河にけりゆく

そのよの河にけりゆくあまの河にけりゆく

廿二の月のあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく

あまの河にけりゆくあまの河にけりゆく

あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく  
あまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆくあまの河にけりゆく





大垣より帰るに初は本因り家へてまゝに帰るにむかしは  
対峙するに心をなやましては格まけられ

死やきぬ旅のついでに秋のくれ  
素名市富ちうし

み牡丹まゝにまゝに帰るに  
その秋より宿傳へてまゝに帰るに

あけほのやまゝにまゝに帰るに  
越前より宿の社殿大に破れ残骸のみかたてて

かくつらに張と張と小社の法をまゝに  
てや作と名のの道まゝのまゝにまゝにまゝに  
めし度うとむしう

まのふさく枯る餅まやううれ

名護屋に入その時

狂の本より一はまにまゝに帰るに

ま枕大も志うまゝにまゝに帰るに

まゝにまゝにまゝに

市人よこのまゝにまゝに帰るに

旅人をん

まゝにまゝにまゝにまゝに

海まゝにまゝにまゝに

海まゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

まゝにまゝにまゝにまゝに



と山あふ年をうへ

流聲了る岩乃あつ餅林あ田のうへ

たふらふあつそはは

まふれやうてふふ山の影のうへ

二月あつ花

水取や水の信は昔のね

高のうへに三井秋風、写流の山あをひ

梅林

くた白しきのふや朝もぬふれ

檀の木の花うかたのぬすこころ

伏見西岸寺任口上人の巻

糸衣の伏見の木の葉さよ

大津の町を山あをうへ

山あをうへやうのうへすうれ

水あつ花

かろさのの杉をうへつ

倉の影のひも松原の橋をうへ

流のうへにけさうけの干鐘さく女

吟行

業をうへけう花えうねるすうれ

水のうへに甘香を流し古くうへ

命あついの中の流うへ橋のれ

伊豆の城の山あをうへと古香の秋うへに折

糸衣をうへに葉の枕のそつこも尾張ふし流



康高日記

後の奥室に於て海月見了りて

松ヶヶや月を三返中 跡を

と云けん程又の世に... 月見んと思ひ... 月を三返中 跡を... 松ヶヶや月を三返中 跡を... 毎月の... 御座りて...

或人の... 野り... 止む... あり...

と云... 海月...

は... あり... あり... あり... あり...



ぬくくや石のおやの昔のな  
宗波  
縁おやかきさくおくまのな  
曾良

田家

かろけい田面の都や里の秋  
秋  
秋のまや福すうけく月をこら  
秋青  
茅の茎や有さの里お焼くけ  
秋青

野

もひをや一花すうけ秋こそ  
曾良  
秋の秋をすうけ秋こそ  
秋青  
秋のまや一花ハやとさ山のぞ  
秋青  
つは自準ふたす

樹をよまろ干石友す  
松江  
秋をこめらくわのき  
秋青  
有んこひひのる舟とる  
曾良

貞享丁卯仲秋末五々

卯辰紀行 又梅芳 野紀行

百積九敷の中子物りか子名付く風野切とて流る  
 子もの、風を破とやするふんて成まよ和所んか狂  
 自をぬむてくし流子生涯のそろうとてあす疾射を  
 健く放擲せんて成射ひあ射すんて人今かさんをも  
 なく是非拍中を片ふるこわらぬるああひん志は  
 方とて入て成わんもいぬるああひん志は  
 是く更もさきいさん事を思へん是く更もさきい  
 守能年流るてく只此一筋に流る。西行のお高きおけり  
 宗船のまきあうおけり雪舟の情におけり利休の夢におけり  
 今貴をすすすものハ一ありきりてい終るおけり造化のまきい

く伊勢を友とす尺くやむ花よりあふいとさきいけ おも  
 愛月をゆふいとさきいけ 思ひ志すあさきり時を妻秋  
 ひく心花手ゆふさきいけ 思ひ志すあさきり時を妻秋  
 多歎をもあれく造化のまきいけ 思ひ志すあさきり時を妻秋  
 和歌の初定さきいけあひけ一きめは風雲のりかまきい  
 地一

松人よ 君のあさきいれん初一とれ  
 さきい山屋あまをたかきり

岩峰の位長左郎とてさああや松を付く女角亭におりて  
 并送るきんよまきい

みんあさきい 時をさきいん 鹿の法と  
 けのハ流流るるてく一終るを付るるるああひのけ















この風程の人は、何れも、  
古めくかゝるもの、  
つとて、  
中、  
今も、

更衣

いよ、  
ト、  
浄佛の、  
と、

浄仏の

菩提寺、

海、  
この、  
旧、

大、

甚、

次

月、  
月、  
即、  
と、  
東、











あけをみく大根かきし秋の風  
木石の縁なき世の人北ち夜うきま  
風ふきの吹くはくは木石の秋

善文寺

月影や四門白雲と只ら  
吹飛するを流石は世をうれ

松くわ了る

月影を言代の過客うきゆふふ事と又旅人多し舟の上  
生涯をうき言のほらうき老とあふふものなり松く  
旅もすきうき古人もねほく旅も死もあつてうきつれ  
事うきうきやの風うきうきうきうきうきうきうきうき  
さきうきうき年の秋に止れ破屋の古葉をうきうきうき  
もくれまきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
物うきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
もくはくうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
すきうきうきうきうきうきうきうきうきうきうき  
風うきうきうきうきうきうきうきうきうきうき

子の戸と便ちうき代了はくわのあ

向八方を度の柱よりけり置やふも事おさるめあめのかね  
と一二月はふくふくしきくもささねるものもふくふく  
うり尺く上野倉中の花の梢かしのうらなむを  
まきかあふくハ青くははら舟にけりてさるふく  
うらなむ舟をぬれハ赤きと千里のさかし舟にけりてさるふく  
かこに龍宮のけしきをさる

ゆくまをやふく舟一魚は舟をさるふく

これと夫とけりめと一ゆくをけりてさるふく  
中へさるふくははらけの尺ゆかちてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく

まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく

まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく

まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく  
まきかあふくははら舟にけりてさるふく







せうくーくーくーめくまにりかた川をさるひらりし會  
 はね守くちと岩味た了まきの宿草下野の地をさうい  
 く山はくぬかけはくまをゆくにりく穴をく物氣  
 うつらす川の輝と等好くまの紋書て四五くめ  
 了えく川の岸ひらりしはくや。向長道の昔くめ  
 けく丸且ハ風を魂くまをれ旅學績を改てさく  
 ーく思ひめくま

風体はけしやたぐ。田桓壽

吾らとくーくーくまうくまかかれハ松舟平とつけく一を  
 ぬけたのたさくく大まの栗の木けをたのてををい  
 信あく椽拾ふ左んかくや。百お初らさく物くま付  
 けくを詞

桑くくくく西の本くまう西方浄去にうめく  
 行甚き一尾の一生杖く。枝くも此本を。用ひまうや  
 母の人れく付ぬ花や。好くめ 栗

多羽くおまかくま甲く。糖皮のおまをまぬくあさく山  
 けくさくくくくはくくはくく。かろく刈くくも。ぬく  
 かれハくつれの子を花く。くくくく人くはくひくく  
 へく文くく人か。ほくあぬ人くくひくくく  
 けくまうくくくくく二本おまう。枝くまれく  
 椽の岩屋一尺。梅高くや。ぬくれくまのまら。摺の  
 君く思の里くゆくく山くけの山里く石まをく  
 里の幸のまくくく。昔く山の上く。付くく。は本の  
 人のままをくくく。此石くく。付くく。は











上平山を越えしむる道は直と云ふは二階を越へしむる  
此中の松林はすくすくやみかきし妙なる地なきなり

松高や 松高や 松高や 松高や 松高や 松高や 松高や 松高や

予ハ此を穿て賊人トシテハ此の地を以て其の地を以て  
対馬を松高の清りし原を這松りし原の和名を以て  
くすくすの地を以てくすくすの地を以て且松高の清りし原を  
十百瑞岳寺と清岳寺三十二寺のわたりし古聖の平田部おま  
しと入唐功約の好軍らしきものらしき居移しの地は  
依りて七聖堂なりしと云ふは古聖の壯麗なるなりやし佛  
土成徳の大伽藍と云われしなりかの入佛殿の寺を以て  
と云ふなり

十二平和泉と云ふはしと云ふは松林のわたりし橋なり

傳へて人治中れし神鬼葛葉のゆきと云ふは  
流るる水と云ふは石のまじりし水と云ふは  
と云ふはたしと云ふは山海と云ふは  
船入はすしと云ふは人かたを以てし  
つはけしと思ひしなり未だなりしなり  
すれは文字言ひしなり  
ゆれは又しと云ふは神の  
るれはと云ふは見しと云ふは  
はりしと云ふは戸守と云ふは  
二十餘里はしと云ふは

三代の宗耀一隆の中より大門の松ハ二里と云ふは  
御り松ハ田野に生く是神山のなりしなり

のちれハ北上山の勢よりあうし大河に衣川ハ相見れ珠をめぐ  
 了て言智のつらし大河の勢入康樹ホの四法ハ衣の算を隔く  
 南のけりささしつりく免夷を防くくくくくくくくくくくく  
 事く此城を籠り功名一時の事わくくくくくくくくくくくく  
 味着くして算をくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 首くけりぬ

さるや 侍くものとも。 守りぬゆと

くろの志く 通る人ぬく白毛。 くれ 曾良

かゆく耳をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 光きくく三代の槍を 納め三つの佛も 安置す七言くあうと  
 く珠の尻風を 破れまきの柱をぬき朽く既く敷座をた  
 の最くぬくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

このく 世母ままの 代念くあみり

さみくぬく 津 跡くくくくくく

あふれそくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 もくくくくくこの場くくくくくくくくくくくくくくくくく  
 とく此法ぬ人ぬくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 光くく算をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 を見くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 習 志くくくくくくくくくくくく 志 志くく  
 物くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 是志くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ぬのくけれハ寛慶の最もの及願差を 横くく根の杖を 携て  
 先くく先くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

かしこみしをわしこむしこむしとわしこむしとわしこむしとわしこむしと  
 き山来とよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 くしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 るしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 かの葉肉をきしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 ばつとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 きとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 尾花留しとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 志しとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 しとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 ばしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 るしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと  
 るしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと

酒掃を拂しと紅粉の花  
 替割す人ハ古代のすしとこれ 曾良  
 山形領と之石とてしと何と道受大砂の石巻とて珠と  
 清洲の地とす一尺とす人このすしと尾花留  
 たりとすしと一尺とす人このすしと尾花留  
 相手をと石巻と昔僧と岩上の院と鹿を穿く物の言  
 とてとすしと一尺とす人このすしと尾花留  
 走りうらや若子とて入様のまじり

ともみ川をわしと大石田とてきしとよしとよしとよしとよしと  
 古く代語の替しとれとてよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしとよしと



八月廿二日 本條志免方より引け宮冠の法をつてみ  
 強力とてこの山をひらきぬるをむかひ山の中より氷をこき踏  
 ぎて八里更なる月行道の中より入るや一歩も  
 息絶えぬとて頂上へ登れはなほ月行のついでを  
 待てて杖をこきひきつゝ待たむとて一歩も  
 歩のかくくは銀治小坂とてさういふの取治雲水とて  
 丁に際斎とて剣をうらひひき月山とて訪をきりて  
 去りてさういふかの就泉とて剣を海とてや干将莫耶と  
 言ふとてさういふ地蔵の執持とてぬとて一歩も  
 けりてさういふ山は三尺とてさういふ橋の法とてさう  
 ひらきぬる降後とてさういふ山は三尺とてさういふ  
 花のさういふ山 炎天の梅とてさういふ山は三尺とて  
 花のさういふ山 炎天の梅とてさういふ山は三尺とて

山のふもとをゆくはさういふ山は三尺とて  
 山中の隠れ行者の法式とてさういふ山は三尺とて  
 さういふ山は三尺とて

坊の隠れ行者の法式とてさういふ山は三尺とて

山は三尺とて

山は三尺とて

山は三尺とて

山は三尺とて

酒田のみやまといふ山は三尺とて  
 酒田のみやまといふ山は三尺とて

山は三尺とて



長久保の海へ入るるまで

江山水陸の風景も盡くると長崎の方寸をきき海國の  
懐く東山の方山をくく破を侍ひいとも踏く今際十  
里の氣風かきくは波風志砂を吹止兩襟籠とく  
海山の山かくる閣中上莫作く向く又きぬくともく  
海の時たまに彩りくく海山の管風を膝へ入る雨の時  
をわいも初天くくもれく初らるるわくくさくわくは  
長崎の舟をくくく先碇固もく舟をくくく三寺遊居  
の波を侍ひわくく舟の舟をわうれい花の上くく浪  
くく楫の先木死り波の波念を初らるるに上り伊陵わく  
神功后宮の御堂もく寺をく満満もくく此の寺の方丈く  
わくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

に層も花ハ風系一眼の中をくく南くく海三をくくくく  
かひくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
も葉く秋田かきくくくくくくくくくくくくくくく  
雲くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
又くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
さくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

まきくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

お記

長崎の料理何れも汁やんぞ 曾良

江戸のなや戸板もあくくくく 佐耳

みゆのふのふ人

若上之暇也の事と云ふ

波のうねるもわらうもみさかきも 曾良

酒田の多岐をなぞる小陸をのちてむかひの思ひ  
胸といふもかたがたの府まは百三十里いふ風の岸  
そこの地は地味のとちりぬをゆくかた中玉一か  
け算のむらげ百れは暑温のちかきゆをまき病者で  
るを記さす

又月やわらりと雪の夜半は仙気

何の海や休渡子橋よ天何

りふの親しくの子に大もく物とく一れよよ小波一の  
龍あましくつれ侍ハ枕引もてて高きく一節隔  
向の方こそつれ女のを二人くくつれぬ事先くさの

こねるも父の物許するをまけハ紙信ふ新侍と云ふ  
の遊女ありし侍は冬言すくして武算すしものいふ  
あすハ古くもくもく又くもくめはれぬふ侍外もわ  
ありしは波のよきつれをくもくもくゆふの子はまを  
あまのりくもくもくめはれぬふ侍外もわ  
侍はれもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
すむひもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
しく侍れハ尺もくもくもくもくもくもくもくもくもく  
侍情の大意のめくもくもくもくもくもくもくもくもく  
最中不便のよもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
おれ一人のぬくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
なつてくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく



むらんやれかふらふまきりく

山中の温泉にゆくはきく根を森にたれりやゆむ左の  
山隈より観る米のつら山は空三十三所の山に子まきりて  
は大意大世の傳とあるまきりてあまのつらやゆむ  
谷組のつらまきりてあまのつらまきりてあまのつら  
まきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて

石山は石まきりてあまのつらまきりて

温泉にゆきてあまのつらまきりて

山中やあまのつらまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて

一村お河の料も清きまきりてあまのつらまきりて

曾良は後を病む侍もまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりて

大聖子の妹か令るまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりて

あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて  
あまのつらまきりてあまのつらまきりてあまのつらまきりて

停るも残照をうえ階のまをわひ末の折る庭中へ  
極られハ

庭掃るわや寺子らハ 柳

長妙のぬき片 子孫のつとむる松の境吉崎の入口  
を舟の棹さしては越の松を君の

松のすくう松のつとむる松のつとむる  
なをいふれもつとむる松のつとむる 西行

此一そとし無系をうらも一辨をわつとむる松のつとむる松のつとむる

凡そ方新寺の長老古ふ因りれハあぬ又是河の少枝と云  
もの徳神子尺送るは松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
すくう松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる

つとむる松のつとむる

物さく扇列さく松のつとむる

五十一山と入る永平寺を礼す是入修沙の修寺に邦操を里を  
廻てかくふは松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
三里はつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
うに松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
あぬ松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
うや人さあわわれ松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
きくに松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
けぬ女の松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる  
ア何し松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる松のつとむる





みらけくのり抑ていことを銭虎既へ後かんとす此の  
かれまのたの地いふつこゆらうちふんしふちのたか  
い風のからいれたてのうしものみあふこけりぬや筆は  
すまふよま書おしねえいしにふくぬたふやふきお殿  
前のかゆいけり人しゆいれえを代の解候二つあふぬ  
ふひしよち路をふいぎのま材をいふこふいふもこい  
候しそいよくい一月のあふは花しらそぬのまはりのも  
さうりくをてうふれは人のちまうもあしにかろふはふ  
ゆいしええさうり言ふたうやをう三間のまなははこ  
し枝の程いしきいけり都め竹の枝折戸やすうううり  
し短あつしまいし南のあふい池に照る水樓とあふ  
地は不二がしと柴門意をしてはえとあふめさう浙江水飲

云すこの池いかなる月をてふたううすうれは秋月  
れまうりやをいふいぬさういむ名月のよき候いふ  
しええさうをうりすきと築店しこせりもおほしうい  
ぬハ半次をいれと風鳥の尾をうりふしあ青扇はれい候  
まうりしすにりし花吹くもあふまうりしき始もいれ  
も谷しゆしゆいかの山井不材の故本にうりし千世  
傷懐素は是うまをさるしうい張横深ハ新秋あふえ  
と海鳥のちうういさういあふりす母あふりしこいふ  
いしけりぬいし風雨はやふぬあふさあふ

柴門解 けりすふりし射の文

去年の秋かきよみ入りかまきしをてけしとそい  
と木のあめ





種子とさみみさうけのしんしんを捨てしものさおひは  
雲のくろくろの羽折のまきまき風をひくくしんしん  
山人のちえしんしんしん

桜の花のくろくろしんしん木さの枝  
しきんれ枝しんしんしん木さの枝

海にさあつしんしん決定すしんしんしんしんしんしん  
かこみしんしんしんしんしんしんしん

送信尊吟集

杖渡り学難をくけしんしんしんしんしんしんしんしん  
手やうしのはしめ信尊武江の東源川の学難をくけしん  
歌子一歩をくけしんしんしんしんしんしんしんしん

酒さきしんしん斗鼓り脚のぬきぬきしんしん又信尊  
消んとしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
中のまきしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
うれしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
かのしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
まのぬきしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
上りしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
勢の毛れくるしんしんしんしんしんしんしんしん

改守賦

正月の時無多か止しんしんしんしんしんしんしんしん















再いふことこそ思ふに其の心をいふは  
くさしにけりおのこころをいふは  
おのこころをいふは

虚業集跋

夢よよよ一葉其味何如  
春杜の心酒をよみて寒山は雲をすこく  
其句々々々々々々々々々々々々々々々  
徒らに風情のその生かすもぬるるの山  
ひらひらぬ蝕葉也  
志の情つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
小窓上陽人の言葉の中より云柳は  
昔の心酒をよみて寒山は雲をすこく

下のあまを唄うる歌その娘娶姑の心けり  
河内のお寺の火が赤いあまの情を  
後をよむる心と心をいふ  
其語震動する言をいふ  
息よ又言をいふは花の心けり  
ほのめく心も待

閑居箴

あまの心酒をよみて寒山は雲をすこく  
其句々々々々々々々々々々々々々々々  
徒らに風情のその生かすもぬるるの山  
ひらひらぬ蝕葉也  
志の情つゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
小窓上陽人の言葉の中より云柳は  
昔の心酒をよみて寒山は雲をすこく

おしめけのきよきふりえん又さききりて入るものごとく  
くさつめが物とてはしらのきや  
風のたけいしむかひとひのき

自得箴

ふささささささささささささささささささささささ  
飛し

入るものごとく人の入るものごとく

枕銘

問ふものごとく付をさけし寝るものごとく  
問ふものごとく寝るものごとく

朝ふりつし年をさささささささささささささささささ  
中つき一物之用をささささささささささささささささ  
つれづれつち二の刺をさささささささささささささ  
これをささささ一用とせんや又二用とせんや

懸葉ふれ

え深仲るきさささ

座右銘

人の心をいさよとせしむればおのれら去を説くもの

張白

ものごとく、静さささささささささささささささ  
秋の風

蘇之銘

山素堂

一 孤重黛山 自笑梅箕山  
 莫懷首陽餓 造中飯穎山

飲公の加ふ酒を生るがみまゆふの意子つとよ持の  
 所りて多のひつつの心言こそ是をたぐみけつけり花  
 入る意子と人なれはたしこのしゆのひさしん  
 つらて海をもふんたれはたしんた人なむけり人曰  
 多虎のひみしお輝入つるふものぬしとさよふに逢れ  
 心ゆりこれやし用ひて居士素翁を乞へこれら名をえ  
 さいむ世こと然はたけり世も世白くれふさもあふ  
 さいふのふしん中へ飯取ふは老林の住りて  
 李白のふしん中れは白り喜翁李白かたして余翁と

きつと人よさうりむきしき射をらふの意はたれを射  
 是一重と手重をいしてて感ふくうりて人て志う  
 物いさつ象はらふふこの世に

梅古翁

うらうらうとれりふと橋所とよ所のみ衆一て  
 む月きさるはるさうぬの終るこわを中しよて  
 とらんとたれは情胸中をさるひて物のらふぬ  
 雅の慶心ありて喜と放いして梅をさる橋とさる  
 をにくとて柱杖一節を命をむすなりとさる  
 強ふこととあふん



通明りしり

七リノチカキヨハシトノ結合羽 松尾

雪竹賛

海の素門を牛とくは像をわらふあるの事この  
あつちけしは沙を画しては海をまじりて  
其ハ六十季の事予ハ既ニ五十ノ年ニ至ルニ  
一ノ言のたらしをいふは是ト云ハルニ  
まもつす

こらちけあをさしり秋の事

竹折賛

此竹のそとに名けらるるものえ上つてはしりしきあひめ  
なは故葉のふたはかたはつたの山にわたりて  
然る竹のかたみあをわらうは積植るはは  
ゆし美人の山に母をたもてあつちけしり人  
のよしきをいふはあつちけしり人  
るつちけしり事の中は積つちけしり

此はちのむり一積り梅の本

平塚山何賛

ゆれもあつちけしり人  
かろつちけしり人  
今に現るる事うらわしめ



あつたかまひかまうた床のほろろきし神のまじり  
さうしぬの匂をかこみこし大木妙典の共きあつた  
し時際をきいて悔の床にさすめあきまの情状  
そんろき登魚龍の愁さくあきさくそんろき  
てあきのあきを破る杖を折て業をすつ改て  
けしめし本店を止片りかこしぬのまじり  
れをきぬし十年のまじり十年のまじり  
ゆ上り生れてあつた神のまじり  
は

八月の法ハ机ハ地隅ハ丸

為茶誅

金華を擲てしと敵てゆゆさるハ士の志し又徳ハ海を  
さしこもて君子のしと敵てす相合茶誅ハ義ハ骨  
わしと敵て筋ハ志をさるハ心けし風を  
肺肝のまじりけしと敵てす相合茶誅ハ義ハ骨  
ぬとさるわしと敵てす相合茶誅ハ義ハ骨  
法をきぬしと敵てす相合茶誅ハ義ハ骨  
いさしと敵てす相合茶誅ハ義ハ骨  
あつたかまひかまうた床のほろろきし神のまじり  
さうしぬの匂をかこみこし大木妙典の共きあつた  
し時際をきいて悔の床にさすめあきまの情状  
そんろき登魚龍の愁さくあきさくそんろき  
てあきのあきを破る杖を折て業をすつ改て  
けしめし本店を止片りかこしぬのまじり  
れをきぬし十年のまじり十年のまじり  
ゆ上り生れてあつた神のまじり  
は

悔中一き忌世とていぬふ秋のいづきをいれし家の枝の  
子あけの口さしむくふとりの好のふりしれき  
想しき母のくみけらうにけしききききき  
めしきくくくく親族のまゝいふしむくむく  
終るもさしむくくく子院ははるかかかか  
よもをま或は世のまゝいふしむくむく  
くく親族と名づくをばもき今日のあしむく  
く時ちりか〜いづ〜いづ〜いづ〜いづ〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜

あ〜〜あ〜あ〜あ

秋風やさなれし〜く〜く〜く〜  
秋の枝

十八樓記

みみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみみ  
い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜  
く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜  
か〜か〜か〜か〜か〜か〜か〜か〜か〜か〜か〜か〜  
舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜舟〜  
海〜海〜海〜海〜海〜海〜海〜海〜海〜海〜海〜海〜  
ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜ち〜



すゝめしむるにせむらひしを親あつしむしかの速成の八の  
うんあゆの十の境を等回一葉の中におもひしむるにせむらひ  
橋よりあつしむるにせむらひ十八橋よりあつしむるにせむらひ  
けあつしむるにせむらひ又あつしむるにせむらひ

残念記

古く枕をふりしむらひの妻妃をかたしむるにせむらひ  
を信しむるにせむらひのよきまらむの上の等々をせむらひの  
かたしむるにせむらひの聖なる母のまをかたしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのやせむらひの物とせむらひ  
はこやせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
昔のあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむる

ふりしむるにせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
浦に山をせむらひの枕の上の二百里のあつしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
をせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ

あつしむるにせむらひ

石の上のあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
寺のあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
あつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ  
あつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひのあつしむるにせむらひ

此の肖像と云唯一の家と云其の如くして故郷の光を  
 やらけ利程の光をとおれし一もまた又かきし一はけふ  
 人の清き心と云れし一神さの物志の心かこふにすま  
 けし一その戸の道根無邪をかくし一神根をうりて  
 龍狸子しと云えし一の住虎の心ゆりし一の信ありし  
 勇士若治也と云家子の伯父と云ん侍りし一も今八も  
 ちし一も本と云えし一の住志人の名をそのみ跡さし  
 市中と云えし一十と云けし一かこま十中しし一も  
 みの虫のこの心と云し一の堀牛家と云えし一其の  
 けと云えし一神と云し一言神と云えし一まは海の  
 踏も破りてし一他のの波と云し一侍の浮草の心  
 かしし一世の心と云し一の心と云し一神湯と云えし

おれと云えし一と卯かのけし一うり神と入し一はや  
 しと云えし一の心と云えし一まきし一まの心と云えし  
 又かし一山と云えし一の心と云えし一神と云えし  
 るし一と云えし一木と云えし一と云えし一と云えし  
 無し一と云えし一の心と云えし一東南と云えし一  
 の心と云えし一申と云えし一の人と云えし一と云えし  
 すと云えし一と云えし一と云えし一と云えし一と云えし  
 かしと云えし一と云えし一と云えし一と云えし一と云えし  
 望と云えし一かきし一木と云えし一の心と云えし一少  
 と云えし一と云えし一の心と云えし一と云えし一と云えし  
 すしと云えし一と云えし一と云えし一と云えし一と云えし  
 神と云えし一と云えし一と云えし一と云えし一と云えし





室の扉をくぐりてさしゆのむらさき風を身にたたくも  
くちを芳しくさすく生確めさうしてさうさくは  
世能く芳しくしては一すまふさうさく樂天の舞のゆき  
さく志村を渡りて管原又舞のゆきさくさくさくさく  
けさみさくさくさくさくさくさくさくさくさく

かみかみむねの木の木も何うも木を

酒首帯に

山を勢うして性をやいさく水は袖を情もたたくさく  
帯二の帯かきさく帯をさくさくさくさくさくさく  
同じく性境を帯りて風流を帯りてさくさくさく  
ゆきさくさく酒首帯さくさくさくさくさくさく

うり入るるゆきさくさくさくさくさくさくさく  
一帯りてさくさくさくさくさくさくさくさく  
帯をさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく  
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

口方より花吹入さく帯の帯

成るる帯上の帯を帯りて詞

文

三十一

松阿の言を九尺丈うの枝さしむるの一文の枝上人をか  
さこの男紫藤とてこゝろやうの風光をゆやうのあきうひはを起  
す等子似菊は以被り似て浪の影をもよく高村牡丹をあま  
る人壽出とゆつたて他はほしく菊を化さく人小福を笑こ  
人下ゆふそふ松木柑熟は今安んて尺の枝葉のかしらを  
吟松はさうちの海をまよ四時をわきまてきうんをけしきを  
まのうの樂天曰およく鹿音を吐かす氣を神はま一人目  
よるこゝろの心を慰すよみゆゆん長生保善の音歌と  
ゆこ中川の雲とましく

元禄四年仲秋日

文混合二款

嗟哉日記

元禄四年未卯月十八日嗟哉日記  
とて未の号をわけてきて未の号をわけてきて  
まよふし子つとく春のうらみ  
休まざる心 机一祝 文庫 白氏文集 本朝一人一首  
巻終物語 源氏物語 去休日記 松葉集を置いたの耐  
臨去るる玉子の思ふべき心(の墓をくもる)右酒一盃を  
たぐりぬのふすし酒業の物も未すし持来たまひふ  
象の足跡をくもるれは清閑の心  
十九日未卯川寺の諸つ大井川ありあはれを嵐山有るう松

文

二十日



曉ちふかりし時ゆきまきぬらん  
 屋平田由の人手しつゝおのふ  
 控りつゝおのふとておのふ  
 古末程とておのふ

廿一日唯教の商まけさぬ  
 似たり程もあつゝおのふ  
 是れ及し古末程の問とて  
 是れ及しに外位危も古末  
 に備ます

廿二日朝の言西海とて  
 表り及しものいふ

海を欲しぬらん

愁を信すものいふ

先無き位もいふ

さしおのふとておのふ

いふとて

いふとておのふ

猶すもいふとておのふ

是れ及しに外位危も古末

むすも又

いふとておのふ

とておのふ寺の智居とて

乙卯の武江より傳つて

千中ぬわのわたり予の住居一は世帯の四代をわたり宗波

わたり一は小堀河のわたり一はまゝのわたり

又云

余住居のわたりは二丈と云ふに一は楓一本かゝるまゝのわたり

わたり一は柳のわたり一はまゝのわたり

又云

物寄のわたり一はまゝのわたり一はまゝのわたり  
わたり一は代わりのわたり一はまゝのわたり

廿三

わたり一は木魂のわたり一はまゝのわたり

又のわたり一は木魂のわたり一はまゝのわたり  
わたり一は竹のわたり一はまゝのわたり  
わたり一は麦のわたり一はまゝのわたり  
わたり一は(麦のわたり一はまゝのわたり)

廿四 題首柿合

巨椀のわたり一は木魂のわたり一はまゝのわたり 九代

わたり一は及ぶまゝのわたり一はまゝのわたり  
わたり一は清見のわたり一はまゝのわたり  
廿五 子那大徳のわたり一は史邦大草尺のわたり

題首柿合

清見のわたり一は伴鳥魚 就荒毒似野人居



枝取今欠赤帆印 青葉く取堪き書

香小督墳

強摸惡情出涼言 一輪秋月野村傳

青季侯情取終韻 何處孤墳竹樹中

茅野しよりニ茶う茂つ柳の家 文章

途中の歌

ほろもきふくや 枝も梅さくら 史邦

青山舎る感句

杜門覓句陳冬已 對客揮毫森少游

乙州未くて武江の歌并智よ分の御紙一を女中より

半信の言月集入 ちよこら後子 貞角

向井峠をくまかーく記

獨の黄くくねくま 月

那ふまう休人子くくくく小至ひん

字取の山女子取をんをかうてわく

いつくくくを失くゆくく 堪 忍

中の刻をくくく 雷霆電陣を就定くくく 対電陣

大まかか柳のくくくくくくくくくく

廿六

芽如くくくニ多き志ける 柳の家 文章

くくけの女取くくくくくく 芭蕉

帽牛くくくくけくくくくくく 古来

人のくくくくくくくくくく 文章

くくくく三度取柳のくくく 乙州

廿七日 人妻の心強きこと

廿八日 言ふに杜若の心もいかにしつははしと見え心奪おき  
とて対公男をてあや陰居て火をゆめ陽井とるし水を言  
るるに飛鳥の心もいかにしつははしと見え心奪おき  
おん蛇を言ふこといかにしつははしと見え心奪おき  
を言ふこといかにしつははしと見え心奪おき  
強き心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき  
志の心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
百りの心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
或対公男の心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき

廿九日 高館後年 天皇似曾 衣川通海月如了

世の心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき

廿日 江州平田の照寺李由侍の尚白子那る清思

竹の子やうに心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき  
尚白  
心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき

二日

曾良本より芳村の心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき  
友門人の心奪おきの言を陰居て又志の心奪おき  
言ふこといかにしつははしと見え心奪おき

延中はわらけつ入の海

大崎やうたたくしむの果

夕陽さうらう大井川舟をくちて島にまき戸を

瀬のゆるい海をこぎたてぬ

三日北風の雨降しくくも路の遠く止し尚々式にのり

とて河原改り宿のり

同日 宿の宿さうらうの宿の宿さうらうの宿止るの宿

柿をくちんてはさきさうらうの果の果の果の果

めりて

こまのわらわ我の果

野の法

伊賀大佛記

いづれは河原宿の天佛の宿さうらうの宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿

宿上人の宿の宿さうらうの宿の宿の宿の宿



卯月の沖次次方の浦一尺とて一人は山を登りてけし月  
半の籠りて喜ぶる時とて衣のてんは海の日とて秋を  
るしとてやや物のたはあきまはれ  
なまゆれをぬきのゆりあつては月

更科娘捨月一巻

下し妹控の月とてまきりあつては八月十日のみとて  
之をきくは数すくおけれは板子あつてはあきまはれ  
とてとていふは更科の里とてあつては八月十日のみと  
て南の西の里とてあつては八月十日のみとて  
かゝるは更科の里とてあつては八月十日のみとて

いねのりひけんとてあつては八月十日のみとて  
いねのりひけんとてあつては八月十日のみとて  
いねのりひけんとてあつては八月十日のみとて  
いねのりひけんとてあつては八月十日のみとて

義とてあつては八月十日のみとて  
義とてあつては八月十日のみとて  
古来

下しそののりひけんとてあつては八月十日のみとて  
下しそののりひけんとてあつては八月十日のみとて  
下しそののりひけんとてあつては八月十日のみとて  
下しそののりひけんとてあつては八月十日のみとて



千面を基し、  
演者たる人々も、  
皆、  
さるる言妙よ海、  
了、  
を、  
は、  
若、  
ハ、  
カ、

此、  
人、  
ア、  
シ、  
松、  
二、  
明、  
予、  
根、  
若、  
の、  
の、  
を、

室のわくを馬の里人の名やとらうけんおそく船をく  
 るうんとうらうの海とくひの原のねの棚の女系のおやを  
 おていふを猿の後のけいあつくけくきぬ臨光の海堂の  
 欽樂の市にまごのひまうく王を人の主藤崎のけいひを  
 と換てうくやあうひの屋をよおをきひのてきき屋  
 新の乱をひわうてあうひのやうやうの対の勢を換ひ  
 清のあをむすや置茶のつ葉のみらうつふくしりや  
 るるいひの一場のそまにねいおはひる人のさけりや  
 ろうくくめくおけの物すふおの持佛一万をるるて  
 うの地からうふおお外いさうまうくくさうをき良  
 信の信よりあひひをゆる人をいさおとくふいしや  
 のうをるるてうけい屋の二堂をかううつ女をるるる

居るさきけ尺ん人にかきとてあけりあう小屋のいひ成れ  
 いひきまをてきかうくふくふくはゆふの木さの柱を誠の若さの  
 けうく枕の上は柱をうけうひのさきまのらお林の里人の  
 入本つて猿の縮らひゆへい鬼の豆畑かよふ外て季ゆへい  
 るるいひのうへい一息はあれて故人をね中まうるうてき  
 とあひの園西うきうてん是非をうてあひいひいひ  
 けいあうてこのいひあひうけをかくて入るるてあひの  
 人うみさきをいひいひ一人のいひ何まゆはをて換て  
 他をいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ  
 走けい生信のけいりていひいひいひいひいひいひ  
 年能やうを物うのいひいひいひいひいひいひいひ  
 先て秋のいひいひいひいひいひいひいひいひいひ



すきいさくわんわんはあまのこころをいふ

喜信不書と初

蝶舞鏡

あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
うすはあまのこころをいふはあまのこころをいふ  
はあまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ

まふれ家の寺の梅の枝はあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ

松島歌

松島を杖末の寺の梅の枝はあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ  
あまのこころをいふはあまのこころをいふ

何れ抱つてありて原あるを... 内あつていふ...  
 高き山... 宿坊高内... 舟の...  
 舟の小舟... つれ... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...

左海岸... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...

月見歌

月見歌... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...  
 舟の... 舟の... 舟の...

ふふし其海に樂天の詩をいひてしき者なりといふく本をいへ  
 老ぬ翁月を物の交束ぬしつきのゆりたみんりいひ  
 ふふしをれの中にも雄然はは海に舟をりてふをりて  
 ちむるもさしつらやさうの風吹こころに三子若の志をいへ  
 さかんやましそそおの友とすこ人と味く洋くのこころ  
 さしそまれいすして飲中八仙の遊いみんちまもわつれ  
 けははしそまてつらぬあ友えふいひいひつ月尺の儀き  
 やい思ひしそはそ夜の浮世のかれ風程をいへる

米らりて友をいへるいひた月夜の歌

かくて三子の舟りきしつゆの月舟をいへるいひの  
 このいひの風情をいへるいひの杖と孫の舟をいへるいひ  
 とは廟の系瓶の舟男ゆれは赤松の舟のいへるいひ

ゆふとあしきさあやあむの霞の舟りし柳の後の山をいへる  
 子さし向ひり枝は梧川の秋は舟りしは言のうねり  
 そそかきつるいりり言羽の舟りし石山の渡り  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり

舟月やあむりしつら七小町

されは舟の舟式船は石山子原の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり  
 舟りしは言のうねりし柳の舟りしは言のうねり



ます博子の御ちくるの純子のやをくたつるの舞の名だつと  
 うたふお志の八人目の志のひよやめふれおし陶朱より舟  
 のまて五洲のゆめとあひ一人の志の歌よきかへん  
 子執女の紅裙と花婿の翠衣をてにししめしめあは  
 れふん行く名の松を御くさふさしやうう上戸の長とく  
 山よりをめぐりしをりゆら藤とて及槐のまゆりて家と  
 おもてんものゆふはけをわめふしとて柳花とまてお手持  
 にあやふ杯のうけはかたれと月を寺の入あはせみとれと  
 をしむるまうし

三十一  
 文  
 三十一

